

SICORP 日本-英国

「非医療分野における新型コロナウイルス感染症関連研究」領域

事後評価報告書

1 共同研究課題名

「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による青少年の生活および健康への影響およびその関連因子に関する日欧比較研究」

2 日本ー相手国研究代表者名（研究機関名・職名は研究期間終了時点）：

日本側研究代表者

森崎 菜穂(国立成育医療研究センター 社会医学研究部 部長)

英国側研究代表者

ポリー・ウェイツ(オクスフォード大学 精神科学・実験心理学教室 上級臨床研究心理士)

3 研究概要及び達成目標

本研究は、COVID-19 パンデミック下で青少年が直面しているリスクの文化横断的な調査に基づき、メール、ウェブやソーシャルメディアを利用した調査を定量的、定性的に分析し、子どもや若者の生活、健康、幸福、家族のニーズに与える影響の解明を目的とする。

4 事後評価結果

4.1 研究成果の評価について

4.1.1 研究成果と達成状況

こどもの生活、教育機会、QOL 等の社会心理的状況とそのリスク因子・保護的因子の把握、こどもおよびその家族のニーズの抽出のために、ランダムに選んだ親子への郵送調査と SNS による参加呼びかけに応じた親子の WEB 調査(2021 年度新型コロナウイルス感染症流行による親子の生活と健康への影響に関する実態調査)を 2020 年 12 月に実施し、「コロナ×こどもアンケート第 7 回調査」と共にその結果を 2022 年 3 月に公開した。特に小中学生の援助希求能力(大うつ病性障害時に周囲の大人に相談する能力)が本人の抑うつ状態レベルと相関することを見出した(論文作成中)。2021 年度もこれらの調査を継続し、コロナ禍の社会的弱者への影響に関して英国との比較研究を行った。日英ともに、低所得家庭群に精神的 QOL が低く、こどもの情動の問題が多く、英国ではひとり親家庭にこどもの精神的 QOL が低いこと、一方日本では有意な差は認められず、英国では年齢が低いこどもの精神的 QOL は低く、日本では年齢が高いこどもの精神的 QOL が低いという日英の違いを見出した。また、オンライン調査「コロナ×こどもアンケート」を 2021 年 9 月に第 6 回、2021 年 12 月に第 7 回を実施し、それぞれ結果を報告書として公開した。この調査のテキストマイニング分析よりこ

どもおよびその家族のニーズを抽出した。また、英国側研究者が英国 Co-SPACE データを解析した手法をつかって日本側研究者が「コロナ×こどもアンケート」5 回分(2020 年 5 月-2021 年 12 月)の調査データを解析し、日本のこどもの心理状況の推移の社会的背景による相違を分析した (Child Adolesc Psychiatry Ment Health.16:89、2022)。その結果、ロックダウン終了後も WEB 使用が多い家庭では問題行動が多いこと、良好な親子関係や友人との交流には明らかな予防効果は見られないという結果を得た。また、これらの結果は、災害時の支援枠組形成のための基礎資料の作成や社会的介入に繋がることを見出した。これらの解析結果は、子どもの精神的健康などのアウトカムの比較にとどまっており、より深い社会的考察に至っていない点が残念である。

4.1.2 国際共同研究による相乗効果

英国における調査結果の和訳・公開を行い、関連研究者以外にも広く周知した点は共同研究による相乗効果である。

4.1.3 研究成果が与える社会へのインパクト、我が国の科学技術協力強化への貢献

本研究の公開報告書はのべ 500 件以上メディアで取り上げられるなど大きな社会的反響があった。また、第 6 回コロナ×こどもアンケートの報告書に記載された「子供のワクチン接種に対する考え」は、第 28 回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会で 5-11 歳児への新型コロナワクチンの接種方針を決定する際の基礎資料となり、我が国の政策決定に貢献した。

4.2 相手国研究機関との協力状況について

若手研究者の研究交流を目的として、日本と英国での研究成果を発表するオンライン発表会を 2 年間で計 4 回行った。相手側との全体会議を兼ねたワークショップの開催報告はない。共同研究としての成果は不十分であった。

4.3 その他

研究代表者が言及した、研究予算が日本側のみの支援のために英国側の研究者に日本側と調査項目や調査時期を合わせて共同で調査を行うインセンティブが発生せず、日本の研究者が英国のデータを活用して同類の項目を使用するという、日本側が英国側に協力を依頼する形での共同研究の実施となったとある。このような一方向性の連携であった点が非常に残念である。